「男、突っ走る！」

第８回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（16）	中央高校1年2組生徒
門野　賢哉（16）	中央高校1年2組生徒
木本　瞬（16）	中央高校1年2組生徒
濱口　寧々（16）	中央高校1年2組生徒
志田　悠喜（16）	中央高校1年2組生徒
尾形　安代（52）	中央高校1年2組担任

1　木内家・全景

2　同・雅也の部屋

雅也が帰宅する――鞄から携帯電話を取り出すと、電話をかける。

雅也「あ、もしもし。かどけん？　ごめんね、さっき電話くれたみたいで」

3　門野家・賢哉の部屋

賢哉が電話をしている。

賢哉「謹慎課題がそろそろ終わるから、十二月入ったら復帰するっていう報告しようと思って、それで連絡したんだ」

4　木内家・雅也の部屋

雅也「良かった。何か変な連絡かと思って気になっちゃってた」

賢哉の声「変なことって？」

雅也「今日、志田が佐藤先生の英語のテストの追試受けに学校来てたんだけどさ、そこ

できのしゅんが来年クラス変えるって話をブログで書いてるって聞いたから」
賢哉の声「ああ、その話か」
雅也「やっぱり、かどけんはもう知ってたんだ」
賢哉の声「そりゃ、帰り道一緒だから話は聞いてたんだよ」
雅也「やっぱり、検定落ちたこと気にしてるの？」

5　門野家・賢哉の部屋

賢哉「クラスで馴染めたないみたいなんだよ」
雅也の声「どうして？　普通に、俺やかどけんとかも普通に話してるじゃない」
賢哉「お前は平和主義だから、変な話は耳に入ってないかもしれないけど、きのしゅんのことを悪く言うやつがいるんだよ」
雅也の声「誰がそんなこと……」
賢哉「光岡とその周りのツレたちだよ」

6　木内家・雅也の部屋

雅也「でも何で悪く言うんだよ」

賢哉の声「きのしゅん、俳優目指してる言ってただろ。それが面白くないというか、生意気と思ってるんじゃないか」

雅也「そんな……」

賢哉の声「前に聞いちゃったんだよ。あんな奴がオーディションに受かるわけがないって、裏で陰口叩いてた」

雅也「検定だけじゃなかったんだ、元気がない原因……」

賢哉の声「きのしゅん自身も分かってるんだよ、自分が裏で変に言われてることに」

雅也「ブログ見たけど、確かに闇を抱えているというか、悩んでる様子だったからね……きのしゅんと直接話してみようかな。やっぱり相談に乗ってあげたほうが良いかなと思ってさ」

賢哉の声「やめとけ」

雅也「え？」

賢哉の声「お前で太刀打ちできる相手じゃない。正直言うと、光岡はお前のことも快く思ってないみたいだぞ」

雅也「え、どうして？　俺、別にあの子の気に障るようなことしてないよ。確かに、普段はあまりしゃべらないけどさ……」

7　門野家・賢哉の部屋

賢哉「学級代表代理やってただろ。その間に、クラスの雰囲気が光岡の思うクラスじゃなくなって、木内の雰囲気というか、真面目な雰囲気になったって感覚らしいんだ。それが気に入らないんだって」

雅也の声「本人がそう言ってたの？」

賢哉「まあ、たまたま聞いちゃったんだけどな」

8　木内家・雅也の部屋

雅也「（イライラして）何、自分が被害者面してるんだって話だよ。そもそも、いきな

り学級代表代理なんて仕事押し付けられた
こっちが被害者だわ。自分は無断バイトで
謹慎になって、学級代表ができなくなった
んだよ。自業自得じゃない。学校のルール
破って謹慎になって、帰ってきたら自分の
思うようなクラスじゃなくなったからって、
俺を悪く言うなんてどうかしてるよ。自分
の事棚に上げて、人の悪口言えた義理かよ。
自分ばっかり正当化しちゃってさ……ふざ
けるのもいい加減にしてって話じゃん。き
のしゅんのことだって、あの子は目標があ
ってそれに向かって頑張ろうとしてるんだ
よ。それなのに、生意気だの裏でこっそり
陰口言うようなことして……一生懸命頑張
ってるんだったら、それを応援してあげよ
うって思うのが本当でしょ。取り巻きと一
緒に文句言うなんて、周りもどうかしてる
よ。光岡君の目標をきのしゅんがバカにし
たって言うんだったら、話は別だよ。けど、
一方的に生意気だからってそんなこと言う

なんてさ……こう言っちゃなんだけど、光岡君は学級代表向いてないと思う。クラスのリーダーとして、一番おかしい言動を取ってるもん。まあ、半年の任期だから光岡君は結局九月で学級代表終わったから良いけど、正直あの子は場を盛り上げたりすることはできても、クラスの先頭に立って引っ張っていくリーダーシップは絶対ない。むしろ俺も、あんな子の後ろについていきたくないもん。濱口とか他の女子だって、光岡君のこと嫌ってるみたいだし、逆に光岡君も女子特有のあのテンションについていけてないのは、普段の顔色見りゃよく分かるもん。学級代表だったら、誰とも分け隔たりなく、クラスの子とコミュニケーションを取って、クラスの模範じゃなきゃいけないんだよ。ただでさえ、無断バイトで謹慎くらってるような子が、クラスの模範になんてなれるわけがない。だから正直、学級代表代理は大変だって言ったけど、光

岡君よりはまともに学級代表をやったつもり。クラスの子の好き嫌いも特にないし、女子とも普通に喋れる。クラスの子が、時間割とか宿題とかの確認を、俺に連絡してくれたときは嬉しかったもん。学級代表をやってるって肌で実感できた。普段先頭に立つことは苦手なんだけど、いざこうやって学級代表やってみると、みんなから頼られるのも悪くないって思った。だから、一人前に偉そうなこと言ってるけど、俺やきのしゅんのことを悪く言う前に、自分の言動を見直せって言いたいわ。もし、光岡君が何か目標を口に出したとしても、絶対に応援なんてしない。むしろ、こっちだって裏でバカにしてやるつもり。まあ、本人の耳に入ったら間違いなく喧嘩になるから、ここだけの話にするけど、俺の本心は、かどけんにも分かってほしい」

9　門野家・賢哉の部屋

賢哉「初めてだな、そんなに怒ったの」
雅也の声「え？」
賢哉「お前は全然怒らないタイプの奴だと思ってた。でも、今の電話の声聞いたら、相当怒ってるってことは伝わった」
雅也の声「当たり前でしょ、これだけ言われて黙ってはいられないもん」
賢哉「俺もきのしゅんも、もうすぐで復帰するから、その時はまた絡んでくれ」

10　木内家・雅也の部屋

雅也「ちゃんと待ってる」
賢哉の声「じゃ、また課題頑張るわ」
雅也「うん。頑張って。じゃあ」
と、電話を切る――鞄の中から参考書を取り出す。と、一枚のメモが落ちる。
怪訝な顔で拾う雅也。
『イチョウの木』というタイトルの下に、詞が書かれている。
雅也「……」

11

中央高校・1年2組教室（回想）

安代の授業を受けている雅也たち。雅也の前ろの席で、メモ帳に何かを書いている賢哉。賢哉、そのメモを雅也に渡す。

雅也「何これ？」

賢哉「読んでみろ」

雅也「イチョウの木？」

と、窓から外の景色を見る――中庭のイチョウの木から、黄色の枯葉がハラハラと落ちている。

賢哉「きのしゅんに回して」

雅也「うん……」

と、メモを後ろの席の瞬に渡す。

雅也「かどけんから」

瞬「（怪訝そうに）何？　（とメモを見ると）何書いてるかと思えば」

賢哉「（雅也と瞬のほうを振り向いて）俺が詞を書いたから、きのしゅんが曲つけろ」

瞬「そういうことだと思った。じゃあ、うっちーが歌ってね。オーディション番組出よう」

雅也「何で俺が……きのしゅんが歌って出れば良いじゃん」

賢哉「じゃあ、三人で出るか」

安代、賢哉が後ろを見ていることに気が付き、

安代「門野君」

賢哉「（ガンを飛ばして）何だ？」

安代「前向きなさい」

賢哉「うい」

雅也と瞬、思わず笑い合う。

12　木内家・雅也の部屋（回想戻り）

メモを見つめている雅也。

雅也「……」

13　中央高校・全景（朝）

14　同・昇降口

雅也が寒がりながら登校してくる――

寧々が室内履きに履き替えている。

雅也「おはよう、濱口」

寧々「おはよう、木内」

雅也「寒いねぇ」

寧々「そりゃもう十二月だもん」

雅也「あのさ、寒くないの、生足で。せめてタイツとか履いたら？」

寧々「生足はＪＫの特権だよ。寒くても、これは死守する」

雅也「風邪ひいたら、元も子もないでしょ」

寧々「大丈夫。靴下の中にカイロ入れてるから」

雅也「そんな小細工してまで、生足を死守する理由がどこにあるんだよ」

寧々「特権のためだって」

雅也「濱口の足見るだけで、余計に寒くなってくるわ」

寧々「あまり足ばっかり見ないでよ」

雅也「別にお前の大根足なんて興味ないわ」
寧々「うわ、そういうこと言っちゃうや」
雅也「冗談だって。ただ、本当に風邪だけは
気をつけなさいよ」
寧々「本当木内って、二組のママだよね」
雅也「ママ？」
寧々「女子たちで話してたの。木内は二組の
お母さんだって」
雅也「みんなロクな話してないんだから」
寧々「何が？」
雅也「いや、別に」

15　同・1年2組教室
雅也と寧々が登校してくる。
雅也・寧々「おはよう」
と、自席につく寧々――雅也、賢哉と
瞬が登校していることに気が付く。
雅也「（感動して）かどけん……きのしゅん
……」
賢哉「ただいま」

瞬「今日から復帰」
雅也「良かった、二人とも。このままフェードアウトしたらどうしようかと思ってた」
賢哉「するわけないだろ。まあ、あと一回謹慎したら学校辞めるつもりだけどな」
雅也「ちょっと、冗談でもそんなこと言わないでよ」
賢哉「冗談なんかじゃないって」
雅也「きのしゅんはそんなことないよね」
瞬「まあ……その予定」
雅也「きのしゅん」
瞬「？」
雅也「自分は目標立ててないくせに、他の人のことを悪く言う奴のことなんて気にすることないんだから」
瞬「うっちー……」
雅也「俺は、きのしゅんの味方だからね。応援してるから」
瞬「うん、ありがとう……」
賢哉「……」

16　同・職員室

安代が昼食を食べながら、仕事をしている――と、瞬が入ってくる。

瞬「失礼します」

安代「どうしたの、木本君」

瞬「ちょっと相談があるんですけど……」

安代「何？」

瞬「来年、クラス変えたいんです」

安代「え……？」

瞬「普通科情報コースではなくて、普通科普通コースに」

安代「そう。年末に、来年度のコース選択についての調査票を配る予定だから、変更するんだったらそのことを書類に書いておいて」

瞬「分かりました」

安代「クラス替えを名乗り出るなんて、何かあったの？」

瞬「いえ。ただ、自分には情報系が合わない

って分かったんで。普通コースなら、情報コースほど検定とかもないですから」

安代「情報系の検定を受けるのは、情報コース特有だからね。それが合わないんだったら、クラス変更は賢明な選択かもしれないわね。木本君以外にも、クラスを変える人が今後出てくるかもしれないし、逆に今普通コースの子が情報コースを選択して、二年生から二組に移るってこともあるだろうし」

瞬「分かりました。三月までは、ちゃんと二組の生徒なんで、よろしくお願いします」

安代「分かったわ。わざわざ報告してくれてありがとう」

瞬、軽く会釈すると、出ていく。

瞬「失礼しました」

17　バス停

賢哉と瞬、その他生徒たちが並んでいる。

賢哉「安代に話したのか？」
瞬「え？」
賢哉「クラス替えのこと」
瞬「……」
賢哉「まあ、お前が決めたことだから、俺は止めないし、何も言うつもりはないけどな」
瞬「……」
賢哉「ただ、木内には早めに伝えとけよ。あいつ、お前のこと心配してたんだから」
瞬「え……」
賢哉「この間あいつと電話してたとき、珍しく不機嫌になったんだよ。光岡の件を話したら」
瞬「……」
賢哉「木内は仏みたいな性格だと思ってたんだけど、やっぱりあいつも人間なんだよな。怒るときは怒るんだよ」
瞬「……」
賢哉「このまま、黙っておくつもりか？」
瞬「いや、そんなことは……」

賢哉「お前が決めたことだから、木内は多分止めることはないと思うけど、早めに言っておかないと、あいつは悲しむと思うぞ」
瞬「そうだよな……」
賢哉「俺も、お前と木内との間に挟まれるのは嫌だからさ、話すならちゃんと自分の言葉で伝えろよ」
瞬「うん……」

18　中央高校・1年2組教室（夕）
雅也が入ってくる――寧々が残って日直日誌を書いている。
雅也「あれ、まだいたんだ」
寧々「うん。日誌書いてなかったから」
雅也「そっか」
寧々「今日って、男子の体育何やった？」
雅也「今日は、バレーボール」
寧々「ありがとう」
雅也「ちゃんと男子と女子で、何やった書いてるんだ」

寧々「当たり前じゃん。日誌なんだから」
雅也「もうちょっと適当に書いてると思って
た」
寧々「失礼な。まあまあ真面目に書いてるよ」
雅也「そっか」
寧々「木内こそ、どうしたの？」
雅也「ロッカーにノート忘れちゃって」
寧々「そっか」
雅也「（ロッカーを探って）ああ、あったあ
った」
寧々「ねえ」
雅也「何？」
寧々「きのしゅん、あんまり関わらないほう
が良いかもよ」
雅也「濱口まで何てこと言うんだよ」
寧々「私も、きのしゅんのブログ見た。正直、
ああいうかまってちゃんは、関わるとかえ
って面倒なことになるんだから」
雅也「……」
寧々「まあ、私がどう言っても、木内のこと

だからきのしゅんとは喋ると思うけど」
雅也「当たり前だろ」
寧々「最近、かどけんと木内しか、きのしゅんと喋ってないことに気づいた？」
雅也「それは……」
寧々「これが現実なの。クラスの子たちは、ブログで自分の思いを発信してもっと自分を見てほしいっていうきのしゅんの存在に呆れてるの」
雅也「けど……」
寧々「好きとか嫌いとかの問題じゃなくて、ただそういうタイプの子と関わるには気を付けた方が良いっていう忠告」
雅也「……」
寧々「そうは言っても、分け隔てなくコミュニケーションを取る木内のことだから、言っても無駄だったかな」
雅也「まあ、このクラスがそういう雰囲気になってるってことは分かった」
寧々「気を付けないと、木内もクラスで変な

目で見られるかもよ」
雅也「濱口は俺を変な風に見てるの？」
寧々「私はそんなことないよ。木内は、クラスの男子の中では、志田と同じぐらい腹を割って本音で話せる男友達だと思ってるから」
雅也「そう……それなら良いけど」
寧々「木内の性格は、時に仇になるんじゃないかって私は思ってる。私の忠告は、頭の片隅に置いといてくれれば良いから。じゃあね、また明日」
と、日誌と鞄を持って出ていく――雅也、瞬の席を険しい顔で見つめている。

つづく